

# EMBL Symposium: “The cellular mechanics of symbiosis: sensing friend from foe” 参加報告書

(2026年3月17日～20日 ハイデルベルグ、ドイツ)

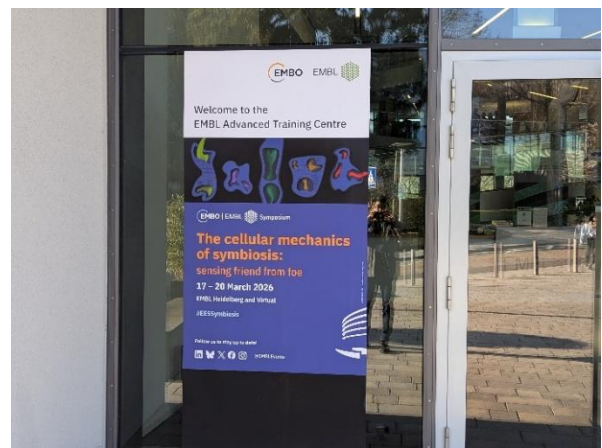
野田 智仁

東京大学大学院 理学系研究科 生物科学専攻

2025年度奨学生

## 学会概要：

European Molecular Biology Laboratory Symposium (欧州分子生物学研究所シンポジウム 以下、EMBL シンポジウム) は、様々な分野・テーマについて定期的に開催される国際シンポジウムである。他の学会と同様に意見・情報交換の場であるとともに、学生や若手研究者に活発なネットワーキングの機会を提供することも EMBL シンポジウムの目的の一つである。今回は、私が従事している微生物共生をテーマに「The cellular mechanics of symbiosis: sensing friend from foe」(共生の細胞メカニズム：味方と敵を見分ける) が掲げられ、有益な微生物と有害な微生物をどのように識別しているのか、またその境界はどこにあるのかといった点について議論が行われた。



(図1) シンポジウム会場

昆虫-微生物共生研究を長らくけん引してきた Nancy Moran 教授や、微生物が細胞小器官へと進化する過程に関して多くの発見をしてきた Jonathan Zehr 博士など、本研究分野を代表する研究者が招待講演を行った。また、ヨーロッパを中心に世界各国から学生や若手研究者が参加し、口頭発表およびポスター発表を通じて活発な議論が展開されていた。



(図2) シンポジウム会場

### 参加の経緯と感想：

私は、昨年参加した国際学会において主催者の一人である Hassan Salem 博士にお誘いいただいたこともあり、本シンポジウムに参加した。また、自身の研究について口頭発表を行う機会をいただき、最終日（3月20日）に「Characterization of cockroach bacteriocytes, adipocytes, and urocytes using single-nuclei transcriptomics」(シングルセルトランスクリプトーム解析を用いたゴキブリの菌細胞、脂肪細胞、



(図3) シンポジウム開会式

尿酸細胞の特性解析) と題して、博士論文の内容を含む研究発表を行った。著名な研究者の中で発表する大変貴重な機会であり、やや緊張もあったが、無事に発表を終え、多くの研究者に自身の研究を紹介できたことは大変光栄であった。

これまでに 40 回以上の国内外の学会や研究集会に参加・発表してきたが、本シンポジウムは特に刺激的で印象深いものであった。招待講演の内容はもちろんのこと、学生や若手研究者の積極的な姿勢も非常に印象的であった。本シンポジウムで得られた知見や人的ネットワークを、今後の研究活動に活かしていきたい。



(図4) 口頭発表後